東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

茨城県鹿嶋市における鹿島アントラーズと地域社会との関係

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永山,淳一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/110326

学芸地理 65 号 2010 年 pp. 47-59

茨城県鹿嶋市における鹿島アントラーズと地域社会との関係

永山　淳一＊

キーワード：プロサッカー，Ｊリーグクラブ，ホームタウン，茨城県鹿嶋市

Ⅰ　はじめに

1990 年代以降，経済的理由などにより企業のスポーツチーム（実業団）の多くが休廃部に追い込まれた[1)]．しかしその一方で，日本プロサッカーリーグ（以下，Ｊリーグ）では，1993 年５月に開幕して以来，2008 年現在までに加盟クラブ数が 10 クラブから 33 クラブに増加している．この背景には，1996 年に提言されたＪリーグクラブが地域社会との積極的な連携を図ることを目的とする「Ｊリーグ百年構想[2)]」がある．1990 年代後半からのＪリーグの平均観客動員数の減少に対して，Ｊリーグクラブはホームタウンとの関係を重視するようになり，より一層の地域への貢献が求められるようになった（川久保，1998）．Ｊリーグ開幕時から各Ｊリーグクラブではクラブ名にスポンサーの企業名ではなく地域名[3)]を入れ，ホームタウン制[4)]を採用している．近年，各Ｊリーグクラブが地域と密着した関係を築きあげることで，地域活性化を促す大きな可能性が期待されている（戸所，2005）．

Ｊリーグクラブとホームタウンとなった地域との関係に着目した研究としては，川久保(1998)の論考がある．ジュビロ磐田とそのホームタウンである静岡県磐田市との関係について考察し，ジュビロ磐田がＪリーグに加盟したことで，インフラの整備が進むと同時にスポンサーであるヤマハ発動機（株）に経済的効果があったことを明らかにした．浅井(2002)はジュビロ磐田の地域貢献活動を紹介している．また，今泉・寺田（2006a，2006b）は新潟県新潟市・聖籠市のアルビレックス新潟と宮城県仙台市のベガルダ仙台を，永山(2007)は静岡県静岡市(旧清水市）の清水エスパルス，宮崎・古屋（2006）は東京都の FC 東京，山田（2009）は埼玉県さいたま市（旧浦和市）の浦和レッズを研究対象とし，Ｊリーグクラブが地域住民と直接関わるような活動の特色と，地域社会がクラブを受け入れていく過程を明らかにしている．

このように，1990 年代後半からＪリーグクラブとホームタウンとなった地域社会との相互の関係性から，「サッカーのまち」づくりに着目した研究がみられるようになった．日本におけるスポーツチームの存続には，欧米にみられるような社会貢献に対する市民の理解を高め，地域社会との連携による共生関係の構築が必要である（三崎，2001）．

そこで本研究は，1993 年のＪリーグクラブ発足当初から加盟し，茨城県鹿嶋市にホームタウンを置く鹿島アントラーズ（以下，アントラーズ）を事例に，Ｊリーグクラブと地域社

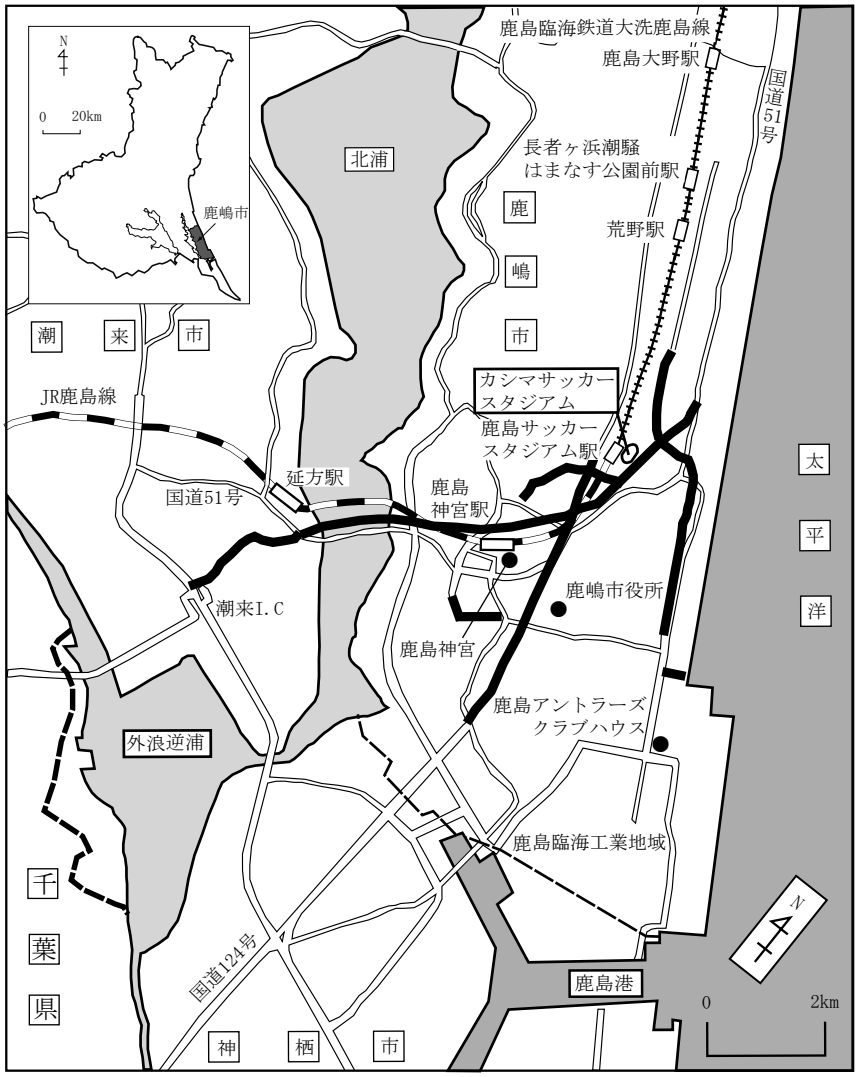
＊東京学芸大学・院（学部 57 期　院 43 期）

会[5]との関係を明らかにすることを目的とする．アントラーズに関する先行研究としては，Ｊリーグクラブ発足が地域に与えた影響について考察した論考がある（五十里，1994；大鋸，1998；岡野，1999）．これらの研究成果を踏まえて，多くの集客を維持してきたアントラーズの活動と，行政やスポンサー企業，地域住民による地域社会の活動から，両者の関係を検討する．

Ⅱ　茨城県鹿嶋市におけるＪリーグクラブとホームタウンの成立

１．研究対象地域の概要

アントラーズのホームタウンであり，ホームスタジアムが立地する茨城県鹿嶋市は，県南東部に位置し，1995年に鹿島町と大野町が合併して誕生した（第１図）．鹿嶋市の南部には，1960年代から始まった開発に伴って鹿島臨海



第１図　研究対象地域の概略図

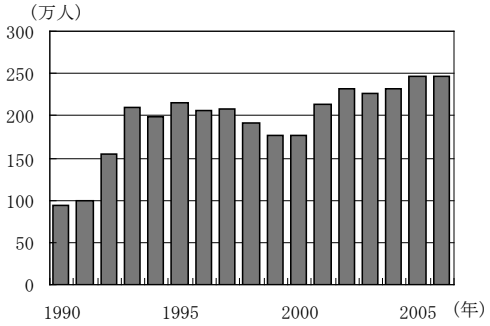
注）　太線で示した道路は2002年日韓ワールドカップの際に新設または整備されたものである．

（鹿嶋市企画部ワールドカップ推進室（2002）より作成）

工業地帯が形成され，住友金属工業鹿島製鉄所などが立地している．

交通面では，市内を2002年の日韓ワールドカップ開催の際に整備された国道51号・124号とJR鹿島線が通り，隣接する潮来市には東関東自動車道が通っている．また，国道51号沿いに県立カシマサッカースタジアム（以下，カシマスタジアム）が立地している．

茨城県観光物産課の資料によると，Ｊリーグ開幕後，鹿嶋市を訪れる観光客は増加し，2006年度には約250万人が鹿嶋市を訪れた（第２図）．この観光客の訪問先は，カシマスタジアムが圧倒的に多く，それに次いで鹿島神宮となっている．下津海水浴場や潮騒はまなす公園場への年間観光客数は10万人程度で横ばいの状態である．観光客数が1993年に200万人を超えたのは，1993年にＪリーグが開幕した影響と考えられる．1999年と2000年はカシマスタジアムの改修工事に伴い，通常のおよそ半分しか試合でカシマスタジアムを使用できなかったため，観光客数が減少したと考えられる．しかし，2001年以降はカシマスタジアムの最大収容人数が約1.5万人から約４万人に増加したことで，2001年以降再び鹿嶋市を訪れる観光客数は増加傾向にある．



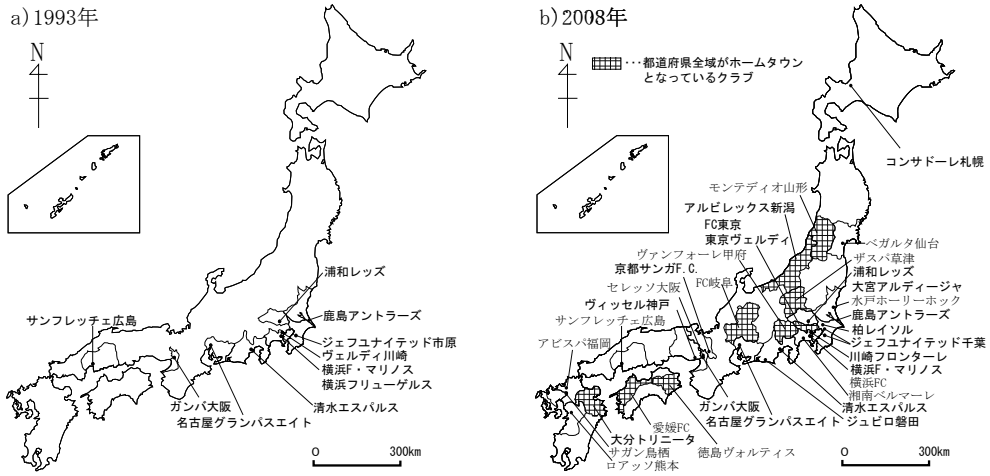
第２図　鹿嶋市への観光客数の推移
（茨城県物産観光課（1990年～2006年）：観光動態調査報告より作成）

２．鹿島アントラーズの結成

1960年代以降の鹿島臨海工業地帯の形成により，公害問題や住宅不足，上下水道の整備などの社会問題が深刻化してきた（鹿島町職員組合自治研推進委員会，1972）．1989年12月に茨城県が鹿島地域の現状を把握するための調査を始めた．1990年６月には茨城県が中心となり，国や鹿島町，神栖町，波崎町，地元企業，学識経験者などで構成された，「楽しいまちづくり懇談会」が発足した．

一方，1990年３月に住友金属が地元への地域貢献を目的に，「2000年ビジョン」という計画を表明した．1985年10月に住友金属のサッカークラブのもとへ１度目のＪリーグ参加の確認状がプロサッカーリーグ設立準備室[6)]から届いた際には，住友金属はプロ化の意思はないと返答していた．しかし，1990年４月に２度目のＪリーグ参加の確認状が届くと，「2000年ビジョン」をきっかけとして同年６月に住友金属のサッカークラブ（住友金属蹴球団）はプロ化の意思を表明した．住友金属がプロサッカー化の意思を表明したことは，「2000年ビジョン」と「楽しいまちづくり懇談会」の両者の地域活性化という目的が一致したところに因る．

しかし，住友金属のサッカークラブのプロ化にはいくつかの問題点があった．それは，住友金属のサッカークラブが日本リーグ２部であったこと，都心から鹿島町までの交通の便が悪いこと，ホームタウンの人口規模が小さいこと，それに伴う集客の見通しがたたないということであった．さらに，最大の問題点はスタジアムがないことであった．Ｊリーグ規約第29条では，Ｊリーグクラブは15,000人以上の収容力を持つホームスタジアムを確保することが義務付けられていたが，鹿島町にはそのようなスタジアムはなかった．



第３図　Ｊリーグ加盟クラブの分布

注）　太字のクラブ名はＪ１，細字のクラブ名はＪ２である．

（Ｊリーグ公式ホームページより作成）

そこで，当時の鹿島町は，Ｊリーグのホームタウンになるべく茨城県と鹿島町周辺町村との協力体制を整えていった（菊原・萩野，2003）．「楽しいまちづくり懇談会」が中心となり，県と鹿島町とその周辺地域・地元企業などが出資することによって，カシマスタジアムが建設された．

このように，地域活性化を図る一手段として，行政が住友金属サッカークラブのプロサッカー化をバックアップすることで，1991年２月にアントラーズのＪリーグへの加盟が実現した．鹿島町や神栖町，波崎町，大野村がそれぞれホームタウンとなり，同年10月に一般公募からチーム名を鹿島アントラーズとし，（株）鹿島アントラーズFCが誕生した．

３．鹿島アントラーズのホームタウンの特徴

2008年現在，Ｊリーグクラブは大都市だけでなく日本各地に広く分布している（第３図）．Ｊリーグクラブが結成された要因は各クラブによって異なる[7]．アントラーズのホームタウンの１つ目の特徴は，J1クラブの中でホームタウンとその周辺地域を含めても，最も人口が少ない地域の１つにホームスタジアムが立地していることである（第１表）．都道府県をホームタウンとしていないアントラーズや柏レイソル，ジュビロ磐田，ガンバ大阪の各クラブは，ホームタウンの人口規模が50万人に満たない．また，ホームスタジアムが立地する市町村人口で比較すると，J1の18クラブ中11クラブが，人口が50万人以上の政令指定都市である．政令指定都市にホームスタジアムが立地していないのは，アントラーズ，柏レイソル，FC東京，東京ヴェルディ，ジュビロ磐田，ガンバ大阪，大分トリニータの７クラブである．

なかでもアントラーズのホームタウンの特徴は，周辺に大都市がなく人口規模が小さいことや，東京都心から約100km離れ，カシマスタジアムへのアクセスが悪いことである．つまり多くの観客を動員するための立地条件は必ずしも恵まれていない．しかしながら，2008年度のアントラーズの平均観客動員数は約２万人で，Ｊリーグ33クラブ中６位である．

２つ目の特徴は，県外からの試合観戦者が多

い点である．Ｊリーグ開幕時には，カシマスタジアムへの観戦者の多くはホームタウンの居住者が占めていた[8]が，現在ではホームタウン以外の地域からの試合観戦者が多い．2006年のＪリーグスタジアム観戦者調査報告書によると，茨城県外からの観戦者が約34％を占めている．さらに2007年においては，茨城県外からの観戦者の割合が約50％に達した．このことから，アントラーズの支持者の多くはホームタウンとの関わりを有していないと推測される．

Ⅲ　鹿島アントラーズと地域社会による取り組みの特徴

１．鹿島アントラーズの取り組み

アントラーズは，Ｊリーグ開幕前の1992年から地域社会との交流に向けた取り組みを開始していた（第２表）．1992年から1995年までに行われた活動は３つあり，そのうち２つがとくにホームタウンにおけるサッカーの振興を目的とした活動である．1994年から開始したフットサルクラブでは，アントラーズの管理のもとでクラブハウスのフットサルコートを使用してリーグ戦などを開催している．この当時のサッカー振興はアントラーズの選手が直接関わっていなかったが，Ｊリーグ百年構想が掲げられた1996年のファン感謝デーから，選手が直接活動に参加するようになった．さらに小・中学生を対象にサッカーだけではなく，テニスやバスケットボール，剣道などスポーツ振興活動が行われるようになった．

次に，アントラーズが主催するサッカースクールとサッカークリニックの開校地についてみる．サッカースクールは，将来，アントラーズで活躍する選手を育成・強化することを目的として運営されている．1992年に鹿嶋校が設立され，ジュニアチーム（小学生），ジュニアユースチーム（中学生），ユースチーム（高校生）が活動を開始した（第３表）（第４図）．さらに，1999年に日立校ジュニアユースチームが，2007年につくば校ジュニアチームがそれぞれ開校した．また，サッカークリニックはサッカーの普及が主な目的で参加の意思があれば誰で

第１表　J1クラブにおけるホームタウンの人口（2005年）

クラブ名	ホームタウン人口	
鹿島アントラーズ	鹿嶋市他４市	28万人
コンサドーレ札幌	**札幌市**	188万人
浦和レッズ	**さいたま市**	118万人
大宮アルディージャ	**さいたま市**	118万人
ジェフ千葉	市原市・**千葉市**	120万人
柏レイソル	柏市	38万人
ＦＣ東京	東京都	1,258万人
東京ヴェルディ	東京都	1,258万人
川崎フロンターレ	**川崎市**	133万人
横浜Ｆ・マリノス	**横浜市**・横須賀市	401万人
アルビレックス新潟	**新潟市**・聖籠市	80万人
清水エスパルス	**静岡市**	70万人
ジュビロ磐田	磐田市	18万人
名古屋グランパス	**名古屋市**	222万人
京都サンガF.C.	**京都市**	147万人
ガンバ大阪	吹田市	35万人
ヴィッセル神戸	**神戸市**	153万人
大分トリニータ	大分県	121万人

注）ゴシック体で表示されているホームタウンは政令指定都市である．

（2005年国勢調査より作成）

第２表　鹿島アントラーズの地域社会に向けた取り組み

年代	活動名称	場所	対象
1992～	サッカースクール	クラブハウス他	小学生・中学生・高校生
1993～	サッカークリニック	クラブハウス他	小学生（幼稚園・中学生）
1994～	フットサルクラブ	クラブハウス	主に周辺地域
1996～	ファン感謝デー	スタジアム	ファンクラブ会員
1997～	キッズルーム	スタジアム内	試合を観戦に訪れた親の子供
1997～98	バスケットボールクリニック		
1998～02	テニス教室	ホームタウン内	ホームタウン内
1999～	アントラーズ杯ミニバスケット大会	スポーツセンター他	関東地方のミニバスケットボール少年団
2002～	幼稚園巡回	各幼稚園	ホームタウン内幼稚園
2002～	マッチデーフェスタ	ト伝の郷Ｇ他	小学生
2004～	ホームタウンデイズ	スタジアム内	ホームタウン（2004～鹿嶋市・神栖町・波崎町・潮来市）
2005～	フレンドリータウンデイズ	スタジアム内	フレンドリータウン（2005～銚子市・東庄町）
2007～	剣道教室	スポーツセンター他	小中学生
2007～	小学校訪問	各小学校	ホームタウン内小学校
2007～	カシマウェルネスプラザ	スタジアム	誰でも参加可能
2007～	地域密着型健康づくり運動推進事業	スタジアム他	地域住民

注）クラブハウスはアントラーズのクラブハウス，スタジアムはカシマスタジアム，ト伝の郷Ｇは，カシマスタジアムに隣接するト伝の郷運動公園グラウンドをそれぞれ指している．
（鹿島アントラーズFC(2008)及び鹿島アントラーズ事業部の聞き取り調査より作成）

第３表　鹿島アントラーズのサッカースクール・クリニックへの参加状況

（人）

年代	開校したクラス	総数	強化	普及	鹿嶋	内原	玉造	高萩	ひたちなか	日立	水海道	美浦	つくば	神栖
1992年	鹿嶋校Jr・Jr.Y・Y	93	93											
1993年	鹿嶋C	169	123	46	46									
1994年		272	142	130	130									
1995年		330	142	188	188									
1996年	内原C	560	154	406	298	108								
1997年	玉造C・高萩C	786	170	616	314	115	54	133						
1998年	ひたちなかC	865	172	693	290	115	42	105	141					
1999年	日立校Jr.Y・日立C	946	184	762	281	118	41	56	185	81				
2000年	水海道C	976	199	777	222	128	27	38	180	113	69			
2001年		1036	216	820	205	150	35	52	191	116	71			
2002年	鹿嶋C土曜コース	1201	200	1001	309	172	39	54	192	160	75			
2005年	美浦C													
2007年	つくばJr・つくばC・神栖C	1783	241	1542	635	161	68	106	210	250	112	112	152	172
2008年	下妻C													

注１）Jr. はジュニアチームの意味で、小学生選抜チームのことである．同様に Jr.Y は中学生，Y は高校生の選抜チームである．C はクリニックのことで選抜チームではない．

注２）強化は選抜チームのことで、普及は選抜チームではないクリニックへの参加人数を示している．

注３）2003 年以降のデータは 2007 年のものしか入手できなかった．

（鹿島アントラーズ FC（1994，1996，1997，1999，2001，2002，2008）より作成）

も加入できる．サッカークリニックは 1993 年の鹿嶋校の開校以降，1996 年は内原校，1997 年は玉造校・高萩校，1998 年はひたちなか校，1999 年は日立校，2000 年は水海道校，2005 年は美浦校，2007 年は神栖市・つくば校，2008 年には下妻校が開校した．1992 年から 2008 年までに，県内３か所においてサッカースクールが，11 か所においてサッカークリニックが開校し，サッカースクール・クリニックへの参加者は増加している．

また，アントラーズはクラブへ出資しているホームタウンとは別にフレンドリータウンを設けている．フレンドリータウンとはアントラーズへの出資義務はないものの，スタジアムにおけるイベント等への参加が可能となる地域のことである．2004 年からホームタウンデイズ，2005 年からはフレンドリータウンデイズのイベントを開始した．これは，鹿島アントラーズのホームゲーム日にホームタウンやフレンドリータウンに対して，「鹿嶋の日」や「神栖の日」などの各自治体の日を設け，各地域の特産品の直売や伝統文化などを披露する場を提供する取り組みである．例えば，鹿嶋の日であれば鹿嶋市内の小・中学生や 65 歳以上の高齢者の試合観戦が無料で，鹿嶋市民が１試合 1,000 円で観戦できる．アントラーズ事業部への聞き取り調査によると，今後も地域住民との交流活動を積極的に取り組んでいく方針とのことである．

2004 年，アントラーズのホームタウンである鹿嶋市や神栖町，波崎町，潮来市の４自治体がホームタウンデイズの対象となった．2005 年に神栖町と波崎町が合併して神栖市が誕生し，ホームタウンデイズの対象となる自治体が３つになったが，2006 年に鉾田市と行方市がホームタウン加わり，2008 年現在は鹿嶋市，神栖市，潮来市，鉾田市，行方市が対象になっている．一方，フレンドリータウンについては，2005 年に千葉県銚子市と東庄町，2006 年に茨城県かすみがうら市と千葉県成田市，2007 年に千葉県香取市，2008 年に茨城県稲敷市とつくば市，日立市が対象となっている．

このように，アントラーズの取り組みは，1993 年までは鹿島町のみが対象であったが，観客数の減少やＪリーグ百年構想を背景とし

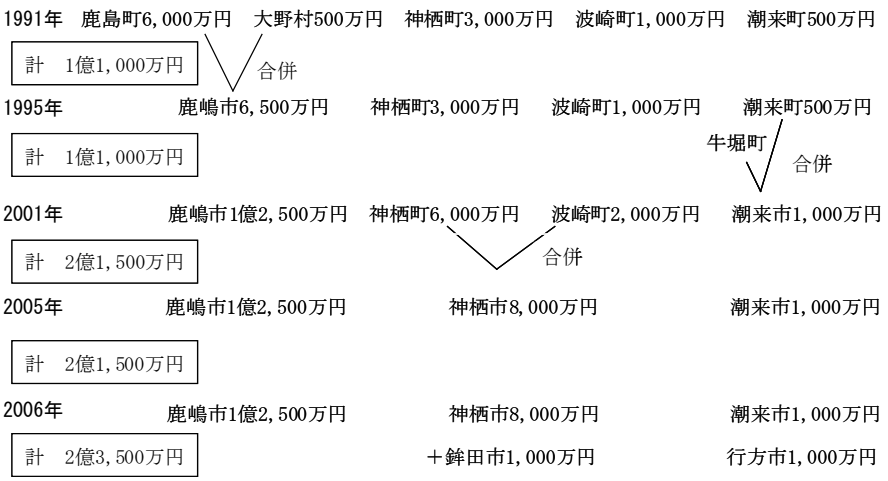
a) 1992 年～ 1993 年

b) 1996 年～ 2000 年

c) 2005 年～ 2008 年

第４図　鹿島アントラーズの活動範囲の変化

（鹿島アントラーズ FC(1994，1996，1997，1999，2001，2002，2006，2008）より作成）



第５図　鹿島アントラーズへの各自治体の出資状況

（鹿嶋市役所ホームページ及び各自治体ホームページより作成）

て，1996年以降は鹿嶋市から茨城県各地，そして県外へと活動拠点が広域化した．加えて，取り組みの内容がサッカーからスポーツ全般へ変化するとともに，その対象も子どもを中心としたものから大人も参加できる内容へと変化した．

２．地域社会の取り組み

１）行政の場合

アントラーズを支える主体として，ホームタウンの各自治体はクラブの株主となっている（第５図）．アントラーズのホームタウンの中では鹿嶋市が最も多くアントラーズへ出資している．1991年の鹿島町のアントラーズへの出資額は6,000万円であり，アントラーズの資本金全体の14%，自治体出資額の54.5%を占めていた．2006年にはアントラーズの経営状況が厳しくなり，自治体への増資を求めると，鹿嶋市の出資額は１億2,500万円へと増加した．アントラーズの資本全体に占める割合は８%であり，自治体出資額の53.2%を占めている（鹿嶋市役所ホームページより）．

また，鹿島町は1994年４月にカシマスタジアムでの試合日のみ臨時停車駅となる鹿島サッカースタジアム駅を新設した[9]．そして2007年からは他のホームタウンと異なり，多くの観客が集まるアントラーズの試合開催日を活用し，鹿嶋市内を巡る無料周遊観光バスの運行[10]やホームファーマー農園[11]を実施している．

一方，茨城県はアントラーズに対する出資は行っておらず，カシマスタジアムの建設や改修，カシマスタジアム周辺の整備などハード面の経済的支援を担ってきた．しかし，近年ではアントラーズを活用した地域貢献活動にも力を注いでおり，2003年からは茨城県内の小学生を無料でアントラーズのホームゲームに招待する「いばらきキッズデイ」を年４回行っている．また，2007年には鹿嶋市市長を会長とするホームタウン協議会にも茨城県企画部長が参加し，アントラーズとホームタウン５市，茨城県などの地域社会が一体となった活動が進められている．

２）スポンサー企業の場合

アントラーズは，行政や企業といった地域社会からの多額の出資を基盤とするクラブであ

る．2008 年現在，アントラーズの株券購入による出資企業は 39 社ある．

アントラーズのスポンサー企業は，クラブオフィシャルスポンサー，サプライヤー，アドボードの３つに分類できる．まず，クラブオフィシャルスポンサーは，ユニフォームに社名やブランドロゴ，製品ロゴなどを掲出できるなど，クラブのプロパティを最大限に活用することができるメリットを持っている．次に，サプライヤーは，ユニフォームやドリンクなどの商品の提供，クラブの公式ホームページの制作などの情報提供，アントラーズのネームバリューを利用して企業名や製品を PR できるメリットを持っている．そして，アドボードは，カシマスタジアムやクラブハウスの看板を用いた広告掲示を行うことができ，来場者およびテレビ放映時に広告効果が期待できる．

2000 年以降，こうしたスポンサー企業の中から少数の企業が，アントラーズを活用して地域に貢献する活動を開始している．住友金属は 2005 年にホームタウン内の小学生に対して，カシマスタジアムの自由席において無料で試合観戦ができるホームタウンキッズパスを配布した．2005 年には，ホームタウン内の小学生 19,310 人，サッカークリニックに参加している 1,210 人にホームタウンキッズパスが配布された[12]．

また，ホームタウンの市町村に本社や支店が存在しないサントリーは，2004 年に小学生を対象としたスポーツクリニックを開催した．クリニックにはサントリーのラグビークラブとアントラーズの選手が参加した．また，サントリーは 2005 年と 2006 年にアントラーズファンクラブ会員を対象に群馬県のサントリービール工場の見学を開催した．

このように，少数の企業が頻度は少ないもののアントラーズを活用した取り組みを行うようになった．

３）地域ボランティアやサポーターの場合

地域住民は，ボランティア活動やサポーター活動，民間駐車場の整備などでアントラーズを支援している．1993 年のクラブ結成当初，アントラーズはボランティアを中心とした試合運営を目指すために，鹿島町体育協会や鹿島サッカー協会，鹿島町文化スポーツ振興事業団にボランティア組織の運営を依頼した．同年，鹿島町文化スポーツ振興事業団内に市民ボランティア団体であるカシマスポーツボランティア（以下，KSV）が結成され，アントラーズの支援活動を行っている．

カシマスタジアムにおける試合運営には，１試合あたり約 140 人の人員を必要とする．アントラーズ事業部への聞き取り調査によると，1993 年では約 500 人がボランティアに登録していたが，Ｊリーグの観客動員数が減少するにつれてボランティア登録者数も減少した．KSV のホームページによれば，2002 年には 316 名（うち 232 名がホームタウン居住者），2008 年現在は約 240 名に減少したが，地域住民が中心となってボランティア活動を続けている．具体的な活動内容としては，入場の受付や座席などへの誘導・案内，身体障害者への誘導・介護などがあげられる．試合を観戦して応援することは目的としていない．

その一方で，アントラーズには，試合を観戦して応援することを目的とするインファイトという私設応援団が存在する．インファイトを創設したＫ氏への聞き取り調査によると，1992 年頃のアントラーズの応援は，住友金属の応援団が行っており，一般市民は試合応援に参加できなかった．そこで，Ｋ氏は誰でもアントラーズの試合応援に参加できるインファイトを組織した．インファイト結成当初は３名で活動していたが，Ｊリーグ開幕が近づくにつれて，イン

ファイトへの参加者は約200名と増加した．増加の要因としては，インファイトへの参加者が友人を連れてきたこと，メディアがインファイトを取り上げたことがあげられる．具体的な活動内容は，試合当日，ゴール裏の席に集まり，大きな旗を振ったり，太鼓を叩いたり，選手への応援歌を歌うなどである．

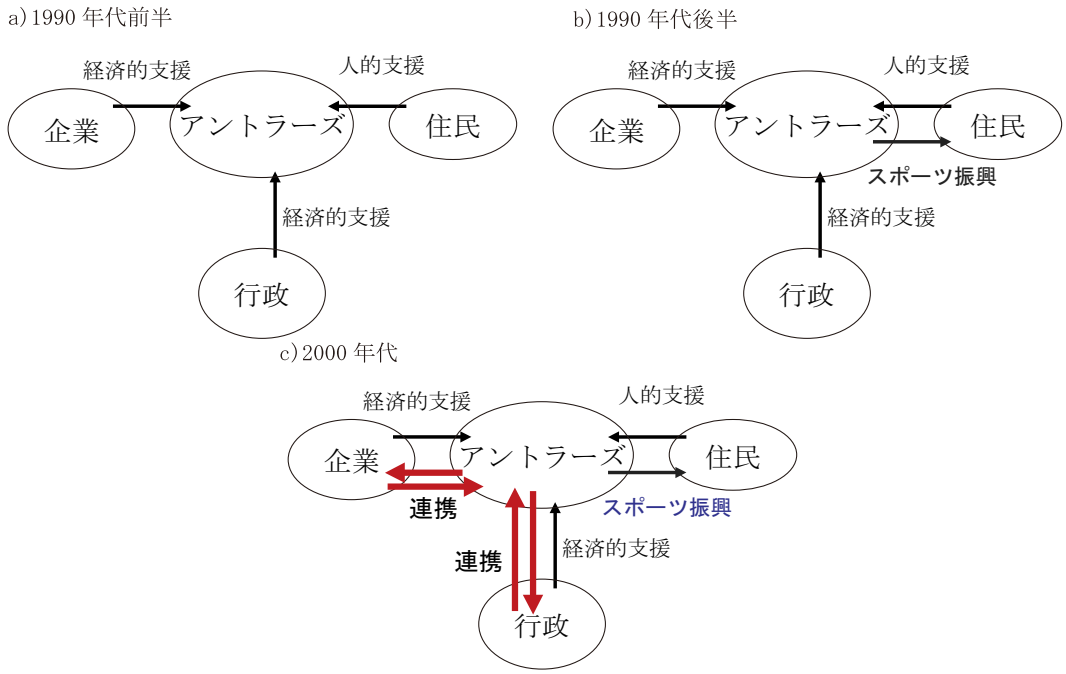
Ⅳ　鹿島アントラーズと地域社会との関係
ーまとめにかえてー

第６図は，アントラーズと行政・スポンサー企業・地域住民からなる地域社会との関係を示したものである．アントラーズと地域社会の活動とその変化を1990年代前半，1990年代後半，2000年代の３つの時期に区分して整理し，まとめにかえることとしたい．

アントラーズは，地域社会の課題解決及び住友金属の地域貢献が要因となり結成された．1990年代前半，アントラーズの活動内容はホームタウンでのサッカー振興活動が中心であったが，1990年代後半になると，アントラーズがサッカーも含めたスポーツ振興活動を行うように変化した．2000年代には，アントラーズホームタウンデイズの提供や高齢者向けの活動などの新たな取り組みも開始した．

一方，地域社会側もアントラーズへのさまざまな支援を実施してきた．行政はクラブへの出資ならびにスタジアムの建設やスタジアム周辺道路の整備などを行い，企業はスポンサー料として出資してきた．また，地域住民はサポーター組織やボランティア活動を通してクラブを支えてきた．

さらに，2000年代に入ると行政はアントラーズの試合日を活用して観光振興や農業振興を目指し，スポンサー企業はアントラーズと連携し



第６図　鹿島アントラーズと地域社会との関係

（筆者作成）

た地域貢献活動を行うようになった．

このように，アントラーズと地域社会との関係は，地域社会がアントラーズを支える関係から，アントラーズが地域社会に対してサッカーおよびスポーツ振興を推進したことで相互関係となり，現在は鹿嶋市における地域振興を目指す中で協力関係へと変化してきた．この変化はＪリーグが掲げたＪリーグ百年構想による影響が大きい．1990 年代後半及び 2000 年代に入ると各クラブで独自の活動がみられるようになったことも，観客動員数の減少を背景としたＪリーグ百年構想が契機となったと考えられる．Ｊリーグ主導で活動内容は変化したが，各クラブ・地域は地域の状況に合わせて活動内容を主体的に決定していた．今後，Ｊリーグクラブと地域社会との関係がより深まることが期待される．

謝辞

本研究は，2009 年３月に東京学芸大学地理学研究室へ提出した卒業論文を加筆・修正したものである．本研究を行なうにあたって，椿　真智子先生をはじめとする東京学芸大学地理学研究室の先生方には，懇切丁寧なご指導を賜りました．また，現地調査の際には，鹿嶋市役所や鹿島アントラーズ FC 事業部など関係諸機関の方々には大変お世話になりました．ここに記して感謝の意を表します．なお本研究は，2009 年８月に行われた日本地理教育学会研究発表大会（於：つくば国際会議場）で発表した．

注

1) 三崎 (2001) によれば，1991 年から 2001 年までの 10 年間に，210 ものチームが休廃部に追い込まれている．例えば，2007 年，ファイテンの陸上部が廃部となり，2008 年においても，アメリカンフットボールの社会人リーグに所属しているオンワードオークスが休部，アイスホッケーの西武は廃部となった．

2) Ｊリーグ百年構想とは，Ｊリーグ公式ホームページによれば，①あなたの町に，緑の芝生におおわれた広場やスポーツ施設をつくること，②サッカーに限らずあなたがやりたい競技を楽しめるスポーツクラブをつくること，③「観る」,「する」,「参加する」，スポーツを通して世代を超えたふれ合いの輪を広げること，を目的に掲げられたものである．

3) 近年，プロ野球でもチーム名に地域名が付くようになった．2004 年に日本ハムが北海道日本ハムファイターズに名称変更し，同年に東北楽天ゴールデンイーグルスが誕生した．2006 年には東京ヤクルトスワローズ，2008 年には埼玉西武ライオンズが地域名を入れたチーム名へと変更している．

4) Ｊリーグは地域社会との関係を重視した方針や理念を掲げ，ホームタウン制を採用している．日本プロサッカーリーグ規程では，Ｊクラブと地域社会が一体となって実現する，スポーツが生活に溶け込み，人々が心身の健康と生活の楽しみを享受することができる町，とホームタウンを定義している．つまり，ホームタウンは，営業権の及ぶ範囲を示しているのではなく，クラブとともに協力していく範囲となる地域のことを指している．1999 年に複数市町村及び都道府県単位をホームタウンとすることを認可したが，1998 年までホームタウンの原則は１クラブ１市町村であった．しかし，鹿島アントラーズはＪリーグ開幕時から特例で広域ホームタウン制が認められていた．

5) 本研究でとりあげる地域社会とは，「一定の空間的範囲の上に存在する行政，企業および一定の空間的範囲の上で生活する人々で形成されている共同体（コミュニティ）」と定義する．ただし，企業についてはスポンサー企業，地域住民についてはボランティアやサポーターとしてアントラーズに関わる一部の住民を指している．

6）当時の日本プロサッカーリーグを設立するための中心組織で，室長は川淵三郎氏であった．

7）清水エスパルスは，企業のサッカークラブではなかったサッカークラブが清水市民の力によってプロ化した（永山,2007）．浦和レッズがＪリーグに加盟できた要因は，プロ化を目指したがホームタウンが見つからなかった三菱重工業のサッカークラブを，埼玉県浦和市（現さいたま市）が受け入れたからである（近藤，2006）．ジュビロ磐田は，ヤマハ発動機のサッカークラブがプロ化し，1994年にＪリーグに加盟した．

8）1993年にカシマスタジアムで行なわれた４試合の試合観戦者の居住地は，全体の約80％が茨城県で,そのうちの約50％がホームタウン内であったことが，高橋（1993）により明らかにされた．

9）以前は北鹿島駅という名称で本来は貨物用の駅であった．駅新設に伴う３億6,000万円の施工費を鹿島町が負担した．

10）無料周遊観光バスは，鹿嶋市商工観光課が企画したものでアントラーズのホームゲーム時に運行する．全行程およそ２時間で，カシマスタジアムを出発し，鹿嶋市の観光地を周遊してキックオフ１時間前にスタジアムへ到着する．

11）ホームファーマー農園は，鹿嶋市農林水産課の企画した農業振興策で，カシマスタジアム近辺の農地において農業体験を行う内容である．2008年現在，鹿嶋市民30名と市外５名（アントラーズサポーター）が参加している．

12）鹿島アントラーズ事業部内部資料による．

参考文献・URL

浅井　誠（2002）：ジュビロ磐田の地域貢献と地域社会．コミュニティ，5,pp.25-34.

五十里　武（1994）：サッカーの町づくり・鹿島町の場合．都市問題研究，41.10,pp.94-107.

今泉延之・寺田智則（2006a）：アルビレックス新潟と地域．企業診断，53(7)，pp.65-70.

今泉延之・寺田智則（2006b）：ベガルタ仙台と地域．企業診断，53(6)，pp.66-70.

大鋸　順（1998）：Ｊリーグクラブチームの設置による地域活性化―茨城県鹿島町の事例―．文化経済学，1（2），pp.65-73.

岡野洋一（1999）：プロサッカーチームの誘致とその経済効果―鹿島アントラーズを事例として―．ほぉるむ，5,pp.26-29.

鹿島アントラーズFC(1994)：『鹿島アントラーズイヤーブック1994』明窓出版，99p.

鹿島アントラーズFC(1996)：『鹿島アントラーズイヤーブック1996』NTTメディアスコープ，135p.

鹿島アントラーズFC(1997)：『鹿島アントラーズイヤーブック1997』NTTメディアスコープ，139p.

鹿島アントラーズFC(1999)：『鹿島アントラーズイヤーブック1999』ケイエスエス，139p.

鹿島アントラーズFC(2001)：『鹿島アントラーズ栄光の10年』ベースボールマガジン社，225p.

鹿島アントラーズFC(2002)：『鹿島アントラーズイヤーブック2002』鹿島アントラーズFC，131p.

鹿島アントラーズFC(2006)：『鹿島アントラーズイヤーブック2006』鹿島アントラーズFC，136p.

鹿島アントラーズFC(2008)：『鹿島アントラーズイヤーブック2008』鹿島アントラーズFC，140p.

鹿島町職員組合自治研推進委員会（1972）：鹿島開発のもたらした鹿島町の現状と問題点．月刊自治研推進委員会，14(12)，pp.43-57.

川久保篤志（1998）：プロサッカーチームの誘致と地域振興―静岡県磐田市を事例に―．新地理，46（3），pp.28-39.

菊原伸郎・荻野寛雄（2003）：鹿島アントラーズの政策過程と地域貢献．大阪商業大学論集，130，pp. 111-135.

近藤裕司（2006）：サッカーを核としたスポーツののまちづくりについて（さいたま市）．月刊自治フォーラム，559,pp.36-41.

高橋秀雄（1993）：鹿島アントラーズ徹底研究．朝日新聞編：『月刊asahi』朝日新聞社，5(10)，pp.244-261.

戸所成之（2005）：プロサッカークラブを活かした地方都市の再生方策―ザスパ草津と前橋―．えりあぐんま，11,pp.1-24.

永山淳一（2007）：清水エスパルスによる地域振興振興．東京学芸大学地理学研究室臨地研究報告，pp.56-60.
増島みどり（2008）：『サッカーのない人生なんて』ベースボールマガジン社，235p.
三崎富査雄（2001）：企業スポーツの今後と地域に求められる役割．地域ニュースレター，31，pp.8-13.
宮崎純一・古屋佐知（2006）：Ｊリーグのホームタウンの活動の現状と方向性―FC 東京の活動事例―．青山経営論集，41 - 2，pp.77 - 82.
元川悦子（2004）：Ｊリーグ成功物語．　エコノミスト，82（5），pp.96-99
山田耕生（2009）：プロサッカークラブの本拠地におけるサッカーのまちづくり―浦和レッズとさいたま市浦和地域の事例―．共栄大学研究論集，7，pp.107-121.
茨城県ホームページ
http://www.pref.ibaraki.jp（最終閲覧日：2008 年 1 月 29 日）
鹿島アントラーズホームページ
http://www.so-net.ne.jp/antlers（最終閲覧日：2008 年 1 月 29 日）
茨城県鹿嶋市役所ホームページ
http://city.kashima.ibaraki.jp（最終閲覧日：2008 年 1 月　29 日）
カシマスポーツボランティア
http://www.sopia.or,jp/kcs/suports（最終閲覧日：2008 年 1 月 29 日）
Ｊリーグ公式ホームページ
http://www.j-league.or.jp（最終閲覧日：2008 年 1 月 29 日）
スポーツデザイン研究所ホームページ
http://www.sportsnetwork.co.jp（最終閲覧日：2008 年 1 月 29 日）

Relationship between Kashima Antlers and Local Communities in Kashima City, Ibaraki Prefecture

NAGAYAMA Junichi*

Keywords：Football，J-League Club，Hometown，Kashima City，Ibaraki Prefecture

* Graduate student,Tokyo Gakugei University